秋の野ゝ色

十一

へ 5
1217
11

早稲田大学図書
へ5
1217
(11)

周防　佐山

歌仙行一折

雨二日御河に山も紅葉風　千秋庵 亀渓

露深くて唄狩の月　支丈

氣安くも持り茶煮沼に澄て　諸芸

はんなりくると出る人常なり　亀山

領遠ひ分子もほんけ懐むる　丹江

来てくる留歳河を竊　古流

托鉢に尼を留主かはしめてあり　如碑
言傳しけり納米の葉　奇光
彼是やまぬ正月に移りすぎし　きく
晴るもうつゝに書かきくく　さ菜
れわく隣中を二人ゝさしあり空　和貌
郭を鄕も鄕を乱るふ米　志柱
奥深お祠ハ淒き積田貴　呂紹
日も暮風と添て黄昏　里秀

おくくを清か納豆手にて足る　笑石
徐の垣屋の垣をすりゆく　恋夕
むも我とく恋もおもろく名留る　其重
名ふし二人さふ霰むし一刷毛　鐵来
名残
笹蟹の栖に情よし明ぬみゑる　廿　乔志
青緑比染と入きて吹羽の風　口　友流
寺の畑に菓山子にくれも古衣　如碑

我まねく袖を招くや葉薄　少年 杏琴

茸狩や山隠れし女声　寄光

刈入し草の中から虫の声　芝水

雨も風も厭はぬ身のあはれさ　深泉

名月に書読し夕秋哉　云く

松ヶ枝に夏座の露や色深　和琴

神前の柳やおもの窓　東松

秋風の夢や猶さそふ　一草

霧の音や雨の夕ぐれ松浦にて　呂伯

静や岳風呂の火も消し跡　里秀

寂寂や化粧湯まで秋新秋　杏夕

秋の夕松と知らる岸の松　荻 一麦

棲遊の霧見えや己し壊錦　山口 栄山

暁や月川のの小糠雨　枝漢

読州司

欣伝行一郎

悠今会
岳洛

其笛ゕ口裁ぬ進て鉄の燃

桂のむよ寄らぬ也　吏た

一ッ京は新涼に人や湊かん　常当

いつもうしろよりて　花子

何不まてもし子日は入りてる楽　几哉

境目の杭は朽てこれ取　埽洞

ウ

咒の利ぬ古語の大猴し　壺天

稀に有坊主ほれ始茫　柳た

去りくくと移て頂中に除とくれ　之三

一里に足らぬ法神社赤坂　研丈

見つりてもあまにあゝ虎に手に卆なし　霞里

御法厳重に宮は造営　古杜

尖らん主玄謡をちくも古蛇　蘭古

何ん喜るお何しや御方口紅　陶何

飛石も二ッ三ッは淋すれ　嗽石

こゝろ乙いつも上来　湖舟

古川にすゝしさもまさりけり月　其冬
花にかはる代のこゝろか　長於
名残
岩にわらはすゝし秋の声　一家園 其當
淋しさ我や静かにとめか夜の雨　其冬
松のとしおかふ梅清水かな　達天
友は夜や十日の月も門にぬけ　花子
今揺しさ庭木の葉や散らしよ　柳左

汲み下頭に松門を踏みの庭の音　長於
豆腐や鶯飛立ちや旅もなし　之
菜のむや誰が前桜のあれ富　陶伯
飛石ついつ緑を彩り音解く風　安里
枝れこゝ之雪に隠くれ夜も花　古杉
京て枕さりや月今青　度江
雨さ松に指しや青一の川　一の甚
鳴きそこ一つ家起きて鶴の卵　宗亭

寒も宿ふ以て通りけり梅の花　玄賦

賊以門ふ呪も○家ふはしきれ　嘲石

旅人のおもんは埒らん康此妙　湖舟

多井うし肉ハ未ふ抄川既巾ふ　故人 一紀

浮れ気ふ酒香留よ桜ふ　日 光朱

月落て松よあり花の霞　雅丈

此人ハ行んて遊ふきめしれ　宗古

寺ふ籠て菜粥すゝるや春の月　梓洞

添るまも離あり星月夜　几哉

落葉て里の寝床や秋の雨　総今会 白路

小郷

遠ふ少居の寐覚や小夜砧　夕陽坊

高机しく透る浅く月　更花

添るゝ山文山此落りて　読苓

二日も之日も雪の日を伴　李水

さわくと鶴氏見川て鶯古巣　東夕

継てもきれぬ縁の綻ひ　石哉
ウ
ゆゑて中の水呂は君か吹　賀居
海へよる子に情つる浦　是居
兎や角ふと添れ結も法花同士　来水
いさ旧来ふまん姉の縁　古訓
咲す寸書のまくしくと　秋月
乳まもれてふ杓の帰　子鹿
墓まゐりの二段の節に身を恨こ　霜枝

解く梓も明し遥いそても　五柳
ゆく〱と流の末は捷のりを　隣雪
口紅斜に三河や場岸　里峯
謡えとて葉に於ふのも恋く　卜巍
彼法の孔も済んでこふしき　如水
二
神宮の神居あれいもうふ　若碎
一の戸二は戸累を伯出戸　虎嘯
残まありきせてるい賞まされ　来只

焚せて下されぬ鳥居風呂　玉川

卯の花は明りも思へ咲こゝろ　采之

折よく咲て風の香も添ふ　左琴

記きとしも辞へ年の治まりけり　鶴濱

銚子替り子蔵ふや治り間き　寿畔

今咲き時の古数ゞ御し文　友舎

東西でゝ度ゑ地は来　其湯

泄しても寿氷は月のうけてる　喜山

右歌仙以下略

其二　三ッ物

河州金小坂
成笑亭
　舟巳

鶏鳴や陀くへ添ふ形りも振ちか

月に晴れ雨風の後　麦花

好きくりし露ふ扉も叙くして　濃恋

名録

夕されや萩の上風萩は露　友舎

秋の月や寺に寄る磯の声　左琴

秋風呼ぶのこゝろし声の秋　長濱

三都の涼しさ去く晩ふりき　亀畝

萩入や雑な時代も晩れ　む碎

浜火の消り殘や小夜千鳥　霞桂

手な屋の燈もゆるむ口紅ふ　梨居

捨りけ松原凄しかんこもる　路雪

涼しさや蝉子汗の燈許　子庭

むし碎て飾りふ哉の霄　其水

石叩ゝ川同而子ゝ吹秋汐干風　里臺

火とりむやえうけの木のとこかゝ　湖水

秋龍や動ゝ川ぬゝ川ゝ的去ゝ　李水

蝙蝠や藁我揚帯し彩帰う　如水

咲残りなも埋んで若菜かな　五柳

きし汐ゝ追し浜の春ゝ風　是居

出代りや若子少ゝ哀と涙んでけり　石茶

猿の声は埋もれな夢の雪　茶夕

霧ゐし我と見て叩く水鶏かな　示占
谷深み雉子啼跡や水の音　玉川
ゆふ暮に池深うして蛙啼　示之
一ッ家に猫妻かよふ夕部かな　卜髄
弓張に烏の影し葉山子は　古訓
明の鐘我とをかしき月夜かな　虎味
山寺は眠りさめてや雉子の声　月秀
樹うちまり霧覚の気あきらしい　甚之

古れおもふ雨のゆふべや一人の夢　石秀
鶯も手にも櫻は白ふ波岸かな　言蔵
香とも風にまかせて河梅は拝合垣　西風窟　夕陽坊
小路柳井田
経営行一折
畑もかり若てもられを蕎麦の花　丹堂居　橘堂
月の出ぬはおもかげに残居　支丸
風鈴も音に名残の乍逆当れて　西菊

包こゝろ持之手しをり　孤雷
何ろまて嘘ともまた比声　了琴
東寺は読か雪の米花地　卜籟
文ねしき彼もそ中まつ民　康李
此頃は粋しや何ぞんじの状　和吟
湖と云り晩しもありし小石川　里鳥
文字も三うしめ古人哭れ　古風
きぬしふをぬ謂れ哉哈を君　花叔

庭砂今は黄色の宿　如水
名深
張へ気の朝まゆゝるはくらふ　里輩
程割て又よ孫刀ぬ露のれ　孤雷
凡ぶんて星のありしおやさし　卜籟
逸してを文ずよ雪や時子今　如水
登さて捨わしく家持味噌ふ　梧堂
芸仰ぞや甘の宿り来す流れる迄　花叔

名月や堤すゝみ遠き松　里圃
蕎麦の中に有る赤蕎麦　卓袋
見つくして面白もなき次第かな　和吟
月影さへ岸や見へる氣の毒　古仏
長門　生雲
經営行一折
見あうて細にかゝましる耳塞ぐ　糸凡舎試作
徐も湯も月に落ぬ秋　支丸

静砂もすしに新蕎麦穂見て　里好
ちんこと有り九折迷　麦水
次せまて穀ふ埜の大燃闘　彰雄
糸ふ中か也て左夷堂也る　兎江
妝よしくと道に涼風折よしく　如舟
弟すくとに編縁の薩よ　可習
浅瀬深にふ小智いぶしさらぬ佐て　素花
さらも淋しめ中静に寛夷　草洸

そのまゝに静かな世の春なれや　京松
露さまれ川魚は見え山　半
冬隣
川音て抱静なりけは霜　いつ里好
吹く日ふ小湊流れ川秋の川　京松
日の暮てさゝる山路や鹿の声　恵江
山寺の暮さ川かなりちる柳　甚れ
松葉を焚て居る山紀や秋の暮　いつ可好

ふゝき鶯ところけり松の雪　素友
湊しもの姿をまつ一葉ふ　鶏旅
ほうしや樹よ道ふ中ふ鶉　如舟
我花ふ柳見流て清水かな　氏沐
北福寿堂
入れは流も暮もよ暮麦の里　志摩新 志考
折ふ二日の月も何里　里起
今更子若暮は秋もをかれて　文和

右三ツ物

ちるまでは山ぬしこゝや迷ふらん　志考

徳佐

縫家行

釣舟や淋しく鳴て千鳥川　安部里嘯

志かしもとに三河月の能宿　又丸

縫殿の桜の色とかきとりて　萬月

此川かなしき猫や娘の　沢毬

ウ

麻は七葉吸ハ八日十二日　河幸

くともにけり虎の毛尾　東情

麦菜を利き草履く長き道　一蔵

風と鶯川て撰れる谷雨　指木

よし栗も原もゑふ万ふ最上の裾　東石

きさ梗の見えちらつと借りた　霜柳

卵も包みて女中のはなして孫　既氷

日暮と追ふて鮓も吸ふ　里夕

竿先のめ川にふ近き汀頃　晴水

宮にかしこき多以恵の菓　化花

いかしては縫とまやる角　流和

昨もは空のちらと村雲　松宇

折ふしに露の夢やら鳴の夢　京休

知らぬ顔して欲を含嬉　菜止

砂こぼれて酒胡よ月の奥　梅宇

秋さの中の例所ゆそとまて　緑枝

ウ

ゆくゆくと岸打波も静まり　志考

余念ましに拝み子供の　路渓

咲きこぼし株先き紙の比　其水

虚なも嵐に俳諧の其　羊

名残

初雲や起かゝれてた己の家　里晄

其風や蝶に咲き浪に舞　化節

編笠を以川頻りや揚雲雀　須鏈

かけ菜屋ハ花の住かも杜若　瓢水

志川として笑ハ斧あり雪の松　女 里夕

夕の菜をちりはめかりたる　宗休

春雨に流れて板塀に　蒐月

蟋の国も志川しのほりて茄子の花　素石

きく菜や菜を流かるるの鮎　流和

白ふの大黒まかりや来た桜　素晴

門トまてい遠も行かや霧月　羽本

すゞ波に洗ましめる田植哉　海中

ゆく／＼の笹月を流す柳の原　松寛

我かおもしろく照らしよ月見哉　かネ 葉止

廉吹に右に板取ふ山端の鳥　口 東柳

鳥影や見て以く角子見る春の兎　志考

嶺わけて寒さへ行や鹿の声　かネ 孫枝

菊を身かけりて朝に汐干に　路琴

従らふ身　まゝ枕葉に子の哉　一鵜

炭やきは郭公も墨し梅の花　梅守

逢拾ひもおれも星の一と夜かな　其水

其月や伏見すゝむ籔の声　晴水

江讃

八句表

次に浮て濡ぬのまゝゐる蓮葉かな　百斉国 楚翠

遠え〳〵語ハ添し袖ハ　変阿

雪ふるその〳〵狩場を飛ぶ〳〵　友李

和歌のをしえは屋きさ霧く　可風

書冊よし春宵ハ昔の香は移り　二翠

我請のあめは今も気色張　柳京

西渡も月の波く〳〵新なやさお　一雄

自由まよ清手見の変詠　緩お

衣縁

お趣のか嫁と訓深み振ゝの声　楚翠

残さよ杉の葉蔭や其は雪　文葉

都にも出んすみも都にて見るに　二翠

聞く人も花に座りや後の月　女　後と

晴れて風情の添し汲むに　二の雄

月は松に移りしきやむら時雨　而凡

帰り路を館もなくて汐干かな　柳亭

田万

清き流れ抱く子や夕時雨　清流園　汎中

幕引く世の細中の月　支左

名残

菊や庭の末葉を咲かぬ先　汎中

親なくて子みも春や二日灸　女　亀枝

山吹も清く徒や初ほくら　〃　琴枝

伴法市

春柳や露の連に通ふ青　大手山下　有只

岩壁清き水の流れかな　支左

京の山田植路くく跡帰りて　清亭

名塚

茶杓やしらて恋の夜しらす　四方ヶ原 清雫

右尺　吹野

月の浦うつ棄れ新や往亂　森樹園 鸝今

引枝の青深む正流れの里　素丸

アくて来さと来情をりの咲しく　同む

右三ッ物

名塚

二またしてめ川くみ花落地ニ部　鸝今

螢火やえせて花をし　漆　廿里梅

知れあんさ名も咲うけて竹のむ　三人三 青萃道

十五堂

十句素

呉竹氣棄うれ川月今青　柳下井 巴的

吹きふ吸ふ柳も秋深む　素丸

呉れ之能の旅もわ乗て来く　緑二

咲さかりのこ華やほこりけり　竹来

菲花比一と声きりけり咲出し　む亭

又例のゝ悟気みとめれ　篤旭

弁割さ業態のなを椋の寄せ　蒙翁

顔は皆戸門下み筆目　雨柳

名ぞしわれ今も散り竪松ケ崎　岸紅

弓とふかし初わかく春　巨秀

名縁

梅咲て梢の度もえ来しぬ　緑二

桃ちりくその下ぬるる猫の恋　巨秀

忍しん許をけく汐干かな　む亭

筆運ぶ弓すも硯ならぬれ　岸紅

風子又咲上られて蕾業の音　廿　蒙翁

何ちこちらと紫も関東業橋に　かすが　何来

義梅も流も清しむ卵の木　雨柳

落々のくと猿そやうくみの実に　篤旭

曲突ハ宗ニ語ゥ鮭のむくろも　巴静

長野

きふくても撓ミ府なり雨の萩　旭左園 洞雲

汐ゥ冬の更け月の山居　支右

了枕さらん二人りゥ中破吹きりて　彩今

右三ッ物

名録

梅咲くや千葉ゟ迄くまに寺　洞雲

稲妻や二度目ニ見せる石ある名　女 素水

梅咲くや福来らしん屋数語　畑 梅枝

奥ヶ砂

きしてそ川傳子張吹川佐の月　流ゝ会 蘇咒

友を訪法し桂り十渡ミ　支右

棒ふても非領らけ秋あて　千賀

右三ッ物

名録

桜見や菜は山ちの花も盛り　菜咲

昼雨に菜に入やきらほころふ　女　ちか

津和野

五十類

遠近くや雁と契清く月の廉　白寿斎　芝れ

川に佗寝の末賀宿之　麦た

青むき読と秋の気居よして　望江

矢のごとくなり二年之年　古瓢

青空に抜きる川清安洲の松檜　碎月

さしこもりする気の引来の　鷺洲

帯川くりと殺か尽りは昼下り　菜暁

樽を派ちも川と仕切衝立　雲像

ウ
建具のやうに揺りと吹きとし　以翠

菖の花咲河祝ひ衛道　可才

橘乗こえつく安菓子石亦菜　英之

刀ぬらしくんの掌しくやう　梅枝

四海波静なる世の何不足も　雨卉

むつくり肥て稲子太の子　松下

いく度も洗ふ茶碗の新しき　竪川

此手ハ引て秋ふ露　浣年

稲もなかり小町之女と逢ふ月　在秋

自然と清んで水も流る　利

大内の御殿の奥さま屋ふ　花江

茶碗不和なき三代の井戸　求志

咲侍ふを連俳と香も席ふ　鶴芳

控ころも実ふ家ふ山く　泥子

二ふあての牛も不実ともれ　巴蓮

稀ひかわらいか家酒もう先　傳山

入佛の供養もよく済ませ法　可笑

堀いさらひみの場不掃　雪琴

御まきみ来まて稀ふ洗ひ髪　文鶴

文ころよみれと押さし此顏　菊操

ウ
うら枯て今もむかしも時雨こそ　河鶯
流の蛍の森庭茶家　牛水
汐茶語も庵くもそれ漫の浦　巴龍
御家條あれ他人てすまし　古梅
きりやうる般に足る和尚様　三彦
せん縫に按一里雲ちと　琴和
折鶴しを出ぬまて島し化とのも　柳泉
蕣帳とけれて思はなる丈　可條

茶人ハこなれて啼茶も茶てり　子雨
菜作に雪の荒て動く　業畔
供勢もゆるん頭を免れし川　松雫
うすの蕎麦も此くるるに　古拙
掛銭も寄る年のまくり濱　文和
さるかとハ山に追々八和　辰翠
雨に月に笠一蓋の雲まで　摩雨
蝶蛉もとまる中あふ気色や　札拙

日まわも行てくて月に氣を取り　蹊球

古雨ふとて昼さみさう　柳泉

三川夏やかけいくと飛ほうり　云水

旅ことい祓うも神妻揺揮　素仙

松しまへて木ふとのなとなり　信山

春の蕨なる末ちよ去　文雅

其二八句表

春ちるや花のそこらし笹の下　鶯文樓 素牛

萬行まふかく翁月　麦花

文綾の式も袂ふさく捕へて　不及

神代の俗のよまふ度今　支川

するうき連る所ふいきれあき　精細

めたくふ流まふ家しけの後家　窓雨

黄人も涼叱青も秀夏し　柳風

五月十日夕暮もおさ屋　菜来

其三云句表

野ゝ川や何ゝ人もすまぬ水に石　東武 卒丈

枝うつりく弦月の美身　麦丈

中しぶる遠とハ稲刈て　秋れ

鋼と焼く鳴け錆をやく鳴　己拙

まさ引る坂に序の己くし　雨夕

かはしるとめる稼ぶ子哭　井波

太源

明月の子のうつ遠ひ出るさゝふ　武州 木陵宗 可化

時雨るしや芳さも子ぶき車牛　ふ及

十六夜や流き川と絶ゆらあるハ　秋 柳風

桑もくれし房ふ咲きやきりくれ　雲僊

長家ぶや綱結ひ貝泊て代挿ゆ舟　巴龍

今朝稲さとさ鳴らしん蔭葉ゝふ　鷺沙

秋雨や飛ゆ石のよふつ今朝　素曉

露の言川拙風ふちゝや芦吹草　以琴

寒てたく様も遠り明子ゝふ　河鶴

しら萩や見よとハ戸をあけまつる　来去
露萩やかへさぬら次漆　桃妃
蒸てみても露ら気月のそ雲ふ　其弘
凍解や筧に何まれ水の声　砕月
花に淵ぬも飛りをりし世龍　己拙
住みしも嚏こぼし君の月　巴遂
柳酒に縁の山吹花盛かな　柳卒
藤さうに咲く晨さん　女　桜枝

ふるふ秋の風吹まさて御稜川　口　利
猿あれあき松や巌せよ　菊琴
凝ふ清く流の了移く青田かな　精紙
深しきに月子気の乱　英之
飛る萩や次才に保ある新雫　支川
きれくの雲や隠りて時雨り　文雅
ふるふ埋よく風ハ吹ても蓑羨　姫秋
梅咲やそ月を相さ鶉飛年　信己

庵さしくも松か古巣の結ひかへに　路聲

夕風や蜂にくはるゝ書の作　摩雨

蓮を折河まもるゝ風の扇に　氷水

立てゝうら稲と知れし焼野かな　東丈

仝

松の声く煙足纔きや夜木立　廣介素牛

名月や峰の雲に離とまり　乃夕

絵ま粧し草難もなしうきの露　雨竹

夜やさしく笛に月澄る秋　古瓢

千鳥啼や遠浦に大の星かぞれ　文和

穐さびしみてかゝりておや小夜砧　長翠

京ても去りし揺風しぐるや夜の月　文彩

あふて見ぬ花の水ありまゐり出　壺雨

捨られて秘りむまて見る尾ひに　松下

つる月と別れて床のまくらへ　一才

稲の月みもかゝりて野分小鮎に　一寿庵

撫し子や浪越もうしろも草の花　吾梁

水鳥や近くうかれて見と此頃　女　琴和

走る波の方川く枕くれても我訟　同　柳糸

掃ても又掃て戻りし落葉哉　同　花社

笑ふまで招きて嬉し蟷螂の爪　おかえし　文江

落栗や鳥の音に又一ツ　須子

聞くきは実や比川ろの流れ舟　鶴山

鼎嘆くやいつしか続の窟　葉樂

山桜くるも去もし木葉に暮けり　花江

落の畑に湧とあけて芋子かな　松亭

聞我ししけ川待のかしまや帯の海　草雨

辻井戸に石なくなりしのゝ音　葉來

夕月や妓もりの煙をとろし　路川

山の井にいつれ見うすや音の露　井波

香のひや荻ろし見越を嫌村　鸛青

慶燭の折り寒に遠ふや帰り来　笠丸

仝

漕く舟に碎けて浪の月涼し　近江 岩セト 半舟

浪にゆられ浮ふくらみて月涼し　同 波年

菜の花や涼みさそふ紙も有るかも　七日市 可笛

明ぬにもまたいかの明子らに　同 古梅

清水の音しずくも知てや夏の末　椿本 可涼

見明しけり夕日紅葉紅葉　播磨庚セ 一枝れ

仝

出てる月涼しに見しふ 榎木らふ　故人 靜林舎